

# 産地の技術と産品を活かし 農商工両立で地域貢献を目指す！

森本パイル織物 株式会社

## 生産量が縮小する中、 高付加価値製品づくりに特化

森本パイル織物は、高野山に近い和歌山県北部にあり、シーツ等に用いられるパイル織物の中堅企業だ。かつらぎ町で織物生産を続ける森本社長いわく「弊社の仕事の多くは、大企業の仕様に基づく下請です。繊維産業は、大企業の合従連携が進んだ結果、生産量が減少し、下請への発注も減少し続けています」

主力製品の自動車用シート生地も、自動車の全体適正が進み、品質からコスト優先に変化し、いずれ中国に流れるか低価格優先商品になると予測している。

「そこで、安心・安全・燃え広がらない・有毒ガスが出ない等の高付加価値が求められ、小ロットながら仕事の継続が考えられる列車用シート生地にシフトしたんです。列車用は、難加工で量が少ない

ので輸入はコストが合いません。産地で培った技術・ノウハウを駆使し高付加価値製品を生産していますが、機械化が進んでいるため、小ロットへの対応が今後の課題です」

このような複雑・難加工品への挑戦は地域から期待されているところだが、加えて農の分野の産品・技術を活かすために立ち上げた『もりもとや』の次の新事業が注目されている。

## 織物とは別分野で 新たな事業収益を確保する！

本業である織物の下請け生産の多くが中国に流れたことで、35名いた従業員が6名にまで減少した。このままでは事業の継続が難しいと判断した森本社長は、収益の安定化を図るべく、別事業の展開を模索した。そして選んだのが、織

物とは全く関係ないあんぼ柿の製造販売だった。

「事業を選ぶ際は、まず最初の立ち上げ時のことを考えました。重視したのは、『小規模』『手作業』『場所を取らない』『原材料入手が容易』などで、これらの条件をクリアすることが必要だと、自分の中で決めたのです」

そこで思いついたのが、子供の頃に実家で作っていた干し柿だった。

「実家では、正月の餅の上に乗せる串柿や干し柿を作っていました。柿に関しては小さい時から身近でしたし、味や作業の想像がつくと感じたんです。そこで早速、ネット通販であんぼ柿を取り寄せて食べてみましたが、種が大きく、食べるところが少ないなど満足できる商品ではなかったんです。その頃、ECショップで販売されるあんぼ柿が人気になり始めたので、美味しいあんぼ柿を作れば、売れると考えたんです」

ただ、味には自信があっても、小規模で販路がないなど問題は山積みだった。「他社はJAのバックアップでパッケージや流通経路も整っていました。これでは普通にやっても勝てないと感じたんです。そこで、柿を夏まで保存して、美味しいあんぼ柿を彼らが売らない夏に売れないかと考えました。超ニッチ市場ですが、我々小規模事業者にとっては十分なサイズなんです」

## 特産品コンテストで 中小企業庁長官賞受賞！

『もりもとや』のあんぼ柿の特長は、種がなく食べる部分が多い点と、夏に食べられる点だ。普通のあんぼ柿は生産に約20



中小企業庁長官賞受賞時の賞状



串柿生産時の様子。これらがあんぼ柿となる



本業のパイル織物の主力商品、鉄道シート用生地

日かかるが、『もりもとや』の場合は約4カ月で、ちょうど夏頃からの販売になる。「違いは渋みの飛ばし方です。通常のあんぼ柿は温度を上げて渋みを飛ばしますが、弊社は温度を下げて渋みを飛ばすのです」

この方法を思いついたのは、偶然冷凍庫に入れたまま忘れていたあんぼ柿を春に食べたなら、甘くて美味しかったことを思い出したからだという。

「その記憶を実現するために、氷温技術を使って氷温熟成することにしました。そして、鮮やかな柿色のまま解凍する技術も開発し、晴れて完成しました」完成までは4年もかかったという。

「完成ついでに、知人の紹介で『平成20年度村おこし特産品コンテスト』に出品したのですが、そこで中小企業庁長官賞を受賞して驚きました」

森本社長は、『もりもとや』のあんぼ柿で微力ながら地元貢献できればとも考えている。平種なし柿のA級品は、一個300円ほどで販売される高級品だが、味に変わりはないと傷のあるB級品は、通常捨てられてしまう。

「皮を剥くあんぼ柿ならB級品を利用できます。農家が精魂込めて育てた柿を無駄なく販売できるだけでなく、弊社のあんぼ柿を売る時期はA級品と異なるため、

競合しません。多くの人に生産量日本一の和歌山の柿を味わっていただきたいですね」

あんぼ柿製造の設備は、実家に整っているので今は家族で作っている。2008年度は家族総出で6000個製造して完売した。今後、さらに生産数を増やしたいという。

「事業を始めるときに考えたように小さく立ち上げました。この事業を柿の産地かつらぎ町の農家とともに拡大していきたいと思っています」

あんぼ柿づくりは、串柿作り400年の歴史があるかつらぎ町の柿農家であれば、『もりもとや』が少しお手伝いすれば、未経験でも取り組んでいけるので、高齢者も含めた人海戦術で対応していきたいという。

## 織物とあんぼ柿を両立しながら、 さらなる成長戦略を検討中

「本業の織物屋は、あんぼ柿が売れても続けます。装置産業なので稼働状況に関係なく一定のコストが掛かりますが、仕事の内容・製品は変わっても、培った技術・ノウハウに磨きをかけ、工夫をしながら続けていきたいと考えています。今後はBtoBやBtoCを想定して、織物屋のノウハウを活用できる事業展開も模索し

ています」

あんぼ柿の一番の課題は販路だという。「ネット販売を強化したいのですが、自社販売サイトの制作はこれからです。また、高野山での店舗販売の話が進んでいます。道は開けつつあるので、販路の拡大と生産体制の見直しを進めて、事業を拡充して『もりもとや』のあんぼ柿をかつらぎ町の新たな産品に育てていきたいですね」

ネットショップでは自社商品の販売だけでなく、和歌山の柿に関する情報発信も行いたいという。

「柿は、和歌山が日本一の産地であること、さらには二日酔いに効果があること、体を冷やすことなど、柿そのもののすばらしさをもっと伝えたいんです」

今後の戦略の中には高級果物が流行している中国等への海外展開も含まれている。

「上海の展示会などへの出展も目指しています。また、高野山での販売開始によって、より多くの人々が、我々のあんぼ柿の存在を知ってくれることを期待しています」

取材協力/Short Cappuccino 中直照



『もりもとや』のあんぼ柿『甘干し四郎柿 氷温熟成』。半解凍していただく美味しく

### 森本パイル織物 株式会社

【住 所】和歌山県伊都郡かつらぎ町中飯降1145  
 【業 種】椅子張り用生地等の製造  
 【代 表 者】代表取締役 森本和洋  
 【資 本 金】2,000万円  
 【従業員数】6名  
 【取 材 日】平成22年9月14日(火)  
 【取材対象者】代表取締役 森本和洋氏

【沿革】  
 昭和26年 創業  
 昭和45年 自動車用モケット製造開始  
 昭和63年 レビアジャガード工場建設  
 平成20年 『もりもとや』を立ち上げ、あんぼ柿の製造販売を開始  
 村おこし特産品コンテストで中小企業庁長官賞受賞



代表取締役 森本和洋氏